

歴史を感じる道づくり・まちづくり

—日本風景街道「若狭熊川・鯖街道」

福井県 若狭町 文化財室

1. 若狭町の概要

若狭町は、福井県南西部の若狭地方のほぼ中央に位置する、人口約1万7千人、面積178.65km²の町です。平成17年3月に三方郡三方町と遠敷郡上中町が合併して誕生しました。北は日本海、南は滋賀県に面し、関西とのつながりが深い町です。

また、若狭湾国定公園の中心部に位置し、平成17年にラムサール条約に登録された三方五湖をはじめ、近畿一の清流北川、名水百選に選定されている瓜割の滝があり、水資源に恵まれた地域にあります。

町の歴史は古く、縄文時代までさかのぼります。三方湖近くの鳥浜貝塚からは、1万2千年前から5千年前の生活を知ることができる貴重な遺物が多数発掘されています。また上中地域の北川流域には、朝廷に食材を献上した御食国若狭のルーツと言われる膳臣一族の古墳が多数存在しています。さらに近世に入ってから、丹後街道と若狭街道の要衝、あるいは人や物が行き交う流通の拠点としての役割を果たす地域となってきたのです。

2. 鯖街道とは

古くから若狭では「京は遠ても十八里」という言葉があります。

若狭小浜から京都まで現在約60キロ、若狭の人は京都を、距離だけでなく、様々な物資の流通や文化の交流のなかで、とても近しく感じていたことがわかります。

小浜から京都に続く若狭街道は、若狭の海産物を都の食卓に運ぶ役割を果たしていました。おもに鯖を初め、鯛、鰯、カレイなどが運ばれていました。小浜の「森田宗太郎家文書」によると、宝暦(1751～63)以降、若狭で鯖が大量に獲れるようになり、獲れた鯖は、一塩したものや四十物として運ばれたということです。特に「鯖の生き腐れ」といわれるように、この魚はいたみが早いので、一塩して朝小浜を出発して、熊川に運んで昼になり、ここから若狭街道を夜通し歩いて京都の大原に至り、翌朝出町に入って錦市場の朝市にかけられました。このように運ばれたものの代表が「鯖」であり、特に京都の人々にとって大衆魚として人気が高かったことから、近年この街道が「鯖街道」と呼ばれるようになったと考えられます。しかし、実は鯖を運んだとされる道は幾通りも存在しており、これらはすべて鯖街道ということになっています。この中で最も利用され発展したのが熊川を越える若狭街道であったということなのです。



3. 熊川宿の繁栄

熊川は、もとは40戸ほどの小さな寒村でした。戦国時代になると小浜城主浅野長政は、熊川の立地条件からみて、軍事上、交通上、重要な地であるとして、天正17年（1589）諸役免除の布告を発しました。

江戸時代に入って、小浜藩を治めた酒井氏をはじめ歴代領主は、経済的公益のための重要な宿場町であるとしてこの政策を引き継ぐことになりました。さらに酒井氏は熊川に関所を設けて通行の物資に運上を課し、また年貢米を保管する蔵屋敷を設けました。これにより熊川は200戸を超える宿場町へと発展することになったのです。

熊川には、宿場の月番問屋の記した「御用日記」など多くの文書が残っています。御用日記は、元禄14年（1701）より始まり慶応年間（1865～1867）に至る34冊が現存しています。その内容は、熊川宿の上がり荷物に関するもの、牛馬、背負人に関するもの、蔵米と町荷運送に関するもの、旅行者の宿泊規制、藩主・藩士の通行、御用金上納など、様々な記録がみられます。これらは、熊川宿の果たした役割を明らかにするとともに、若狭街道の交通・経済を知る重要な文書であるといえます。



中ノ町の町並み

江戸時代初期の若狭街道の上がり荷について

は、津田一助の「稚狭考」に記されています。それによると、延宝9年（1681）には、米・大豆・小豆24万3千俵、その前年には四十物7万3千個、船数1055艘前後が小浜港に入津したといえます。荷物の内容は、北は北海道の松前の産物、南は九州の筑前の陶磁物、日本海側諸藩の上米、鉄、塩、材木、四十物など多彩でした。

「小浜市場仲買文書」によると、往時は60万俵の米・肥料・魚などが小浜港に上げられたということです。牛馬平均2俵半の荷を運ぶとして1年で240日稼動したとして1日1000頭の牛馬を要したことになります。牛馬のほかに背持人夫、あるいは熊川までは、北川を船で上がったものもあったようです。「御用日記」享保14年（1729）の覚書によると、越後・宮津・田辺・峰山・豊岡・出石などの蔵米、かれい・あご・あじ・たら・能登いわし・のと鯖などを塩で処理したものや四十物、干し魚、その他たばこ・厚紙・半紙・木地・ごま・鉄・銭などが運ばれています。いかに熊川が流通の中継地として栄えていたかがわかります。

熊川の経済的発展を考える上で問屋の役割を抜きにしては語れません。荷継ぎをさせる問屋・脇問屋は15軒ほどありました。江戸中期には有力な問屋は8軒あり、これらの問屋は、荷継ぎ立てだけでなく、宿屋を営み、さらには小浜藩のご用金もたびたび用立てていたということです。また町役人として藩の御用や町人の願い事の取次ぎなど、庄屋とともに町の自治にも活躍しました。現在も、勢馬清兵衛家（菱屋）や荻野八左衛門家（倉見屋）などが往時の姿を残しています。

では、宿場町としての熊川はどうだったのでしょうか。普通宿場には、旅人の宿泊・休憩の機能が備わっているものですが、熊川の場合、その機能は他所と比較しても少ないものでした。そのなかで、「御用日記」寛保2年（1742）では、諸藩の大名や幕府の役人が休憩宿泊するお茶屋（本陣）が設けられていたことがわかっています。熊川に宿泊する社寺霊場巡拝者の数は多く、享保8年（1723）には、7月24日に217人、25日に424人などとなっており、巡礼宿は30軒ほどであったろうとされています。

時代は下り大正 11 年（1922）、熊川に大きな転機が訪れます。国鉄小浜線が全線開通したのです。鉄道の開通はこれまでの物資の流通経路を大きく変えることになりました。小浜からの物資の輸送ルートは敦賀または舞鶴を經由して京都に向かうことになったのです。これにより熊川の繁栄は終わりを迎えたのでした。



旧問屋 倉見屋

4. 町並み保存の始まり

昭和 50 年、国道から外れ、静かに佇んでいた古い町並みが、福井大学の福井宇洋先生によってその価値が見出されました。昭和 56 年には、福井大学による伝統的建造物群保存対策調査が行われ、その後、日本ナショナルトラスト（現在東京大学教授西村幸夫先生）の調査などが行なわれました。その間、積んだり崩したり、長く議論が積み重ねられ、ようやく平成 8 年、熊川宿は国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されました。合わせて、水の郷百選、歴史国道にも選定されています。山並みを背景に幅広い街道にそってさわやかに水音をたてて流れる前川と平入り妻入りの混じった変化に富んだ家並みが評価されたのです。

5. 暮らし続けるためのまちづくり

熊川宿では、昭和 50 年代から活発なまちづくり活動が行われてきました。平成 7 年に「若狭熊川宿まちづくり特別委員会」が発足すると、その会を中心に、活動が大きく進展しました。河合健一会長は、いわゆる観光地ではなく、ここに住民が暮らし続けるためのまちづくりを行なっていくことを目標に掲げました。伝建選定後は、この目標を見据えながら、住民と行政が一体となって、着実に事業を展開させてきました。美化活動、広報誌の発行を始め、工芸品の開発、語り部の養成、まちづくりフォーラムの開催などその活動は多彩です。平成 10 年には、京都から伝わった「てっせん踊り」を 80 年ぶりに復活させ「熊川宿伝統芸能保存会」が発足しました。平成 14 年には、白石神社の山車と見送り幕を 40 年ぶりに復元させました。また、伝建による修理事業が始まると技術者が集まり「熊川宿町並み保存伝統技術研究会」が発足しました。平成 12 年から始まった秋の観光イベント「熊川いっぷく時代村」は、若手を中心とした実行委員会が盛り上げています。

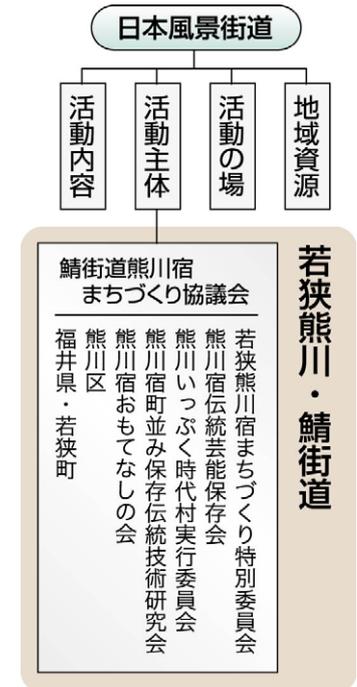
伝建選定後、町の方でも国や県の支援をいただきながら、様々なハード事業を実施してきました。毎年行っている 4 棟から 5 棟の伝建制度による民家修理事業は、現在まで 70 棟が完了しました。平成 9 年には資料館、旧逸見勘兵衛家の整備、平成 11 年には道の駅「若狭熊川宿」の整備、中ノ町の景観整備（電線の地中化、前川の石積み護岸、地道風舗装等）が行われました。また平成 14 年には熊川番所の復原整備、同年から平成 17 年にかけて、下ノ町と上ノ町の景観整備（電柱のセットバック、前川の石積み護岸、地道風舗装等）が行われました。

6. 日本風景街道の取り組み

伝建選定から10年が過ぎた平成18年、景観整備が進み、観光客が大幅に増えた反面、少子高齢化が進み、空き家も増加しました。この変化は住民の生活環境にも少なからず不安を与えました。そこでこれらの新たな課題に対応するため、熊川区は「第二次熊川まちづくりマスタープラン」を策定し、今後のまちづくりの方針と具体的方策を定めました。

これと時期を同じくして、熊川宿は、国土交通省の日本風景街道のモデルルートとなりました(平成19年度に本ルート登録)。その中で、熊川のまちづくりに関わる団体と行政が一体となって、「歴史を感じる道づくり」をテーマとして、取組んでいくため、関係団体から構成される「鯖街道熊川宿まちづくり協議会」が結成されました。

その後「まちづくりマスタープラン」に基づいて「日本風景街道」等を活用した事業が展開されていくことになりました。



鯖街道熊川宿まちづくり協議会組織図

7. 熊川宿の今

熊川宿のまちづくりには、2つの大きな特徴があります。ひとつは、住民と行政が手を携えて取組んできたということ。もう一つは、個々の住民が自分の特技や興味を活かすかたちでまちづくりに関わり、「みんながよくなる」ことを目指していることです。これらの特徴を示すいくつかの事例をご紹介します。

○旧逸見家を活用したおもてなし ～自立したまちづくり型経済活動の実践～

熊川の来訪者は年々増え、いっおくできる場所や来訪者と住民が交流できる場所がないという感想が聞かれるようになりました。そんななか、マスタープランの会議の席上、自分たちの手でいっおく処をつくりたいという意見が出されました。早速、全住民から参加者を募り、「おもてなし研修」と題し、地元の主婦が運営している宿泊施設である愛媛県内子町の石畳の宿を訪ねました。そして、研修終了後、参加したメンバーが中心になって、平成19年3月、自立したまちづくり型経済活動と来訪者との交流をめざす「熊川宿おもてなしの会」が設立されることになったのです。会員は一万円の出資を条件として募集したところ26名が集まりました。現在、日曜日と祝日に限り、旧逸見家の土間部分を喫茶スペースとして利用し、特産の葛を使った葛ようかんを看板



おもてなしの会と旧逸見勤兵衛家

メニューとして「勘兵衛茶屋」を営業しています。勘兵衛茶屋のコンセプトは「和風・手作り・おもてなしの心」。お店の雰囲気や接客のあり方などにも会員のこだわりがあります。葛ようかんは、京都からUターンされた元和菓子職人であった方の発案による一品です。会員が当番で、調理、接客にあたり、来訪者との交流も進み、好評をいただいています。

また平成21年5月からは、旧逸見家の土間以外の部分を宿泊施設として活用を始めました。これもおもてなしの会の会員により運営されています。会員の負担にならないように週1回程度の営業となっています。食事は、熊川で取れた米や新鮮な野菜を提供します。運営は、エコ・グリーンツーリズムの考え方を基本にしており、地区住民が家の土間部分を開放して「体験工房」にするなど、来訪者の体験メニューも豊富にそろえています。これまで約20組のお客様にお越しいただいておりますが、地元住民によるおもてなしに大変好評をいただいています。

なお、これらの事業は、営利目的ではなく、まちづくり型経済活動と位置づけており、その収益は、まちづくり活動の資金として地域に還元されています。

○点から線へ、鯖街道の可能性を探る

熊川宿は、鯖街道の宿場町として発展してきました。そして今も今後も変わらず鯖街道あつての熊川宿です。そこで、これからも鯖街道の各地域との交流を更に進めていくことが重要であるとして、平成19年8月、「鯖街道」をテーマに活動している団体が集まってシンポジウムを開催しました。集まったのは、鯖街道の始点である小浜、滋賀県の保坂、朽木、京都市の一乗寺、鯖街道の終点である出町、そして地元熊川の計6団体。パネルディスカッションでは、京都府立大学の宗田好史先生の司会により6団体の代表の方がそれぞれの地域資源や活動を発表し、どのように各地の活動を結びつけていくかについて話し合いました。その後、街道に櫓を組み、「鯖街道総踊り」として「朽木音頭」や「てっせん踊り」を参加者全員で踊り交流を深めました。今後は、日本風景街道の活動を通して更なる連携、交流を深めていくことになっています。

○安心して暮らせる、訪れる町へ ～防災まちづくりの取り組み～

熊川宿は、街道に伝統的な木造建築が軒を並べる町並みです。また古くから幾度も大火に見舞われた歴史を持っています。さらに近年は、少子高齢化と観光客の増加により、住民の防災上の不安が大きくなってきました。そこで、平成20年度、町が主体となって「伝建地区熊川宿の防災まちづくり計画」を策定しました。その中で、住民のワークショップを5回開催し、住民自ら定めた住民アクションプランを計画に取り込むことで、住民と行政の協働による計画として完成しました。その後、自主防災会が発足、訓練や研修を行うなど、災害に強いまちづくりの取り組みが始まっています。



高齢者対象の初期消火訓練

○平成の名水百選「前川」とホタルが飛び交う自然環境の復活

熊川宿の町並みを街道に沿って流れる前川は、熊川宿が誕生した約400年前に、灌漑用水、防火用水あるいは生活用水として人工的に作られた水路です。その前川が平成20年に環境省の平成の名水百選に選定されました。区民は毎年清掃作業を行い、美化に努めており、住民の生活の中で守られてきた名水であるということが評価されたのだと思います。このことをきっかけに、さらに区民の環境保全に対する意識が高まり、さらに自然環境を改善して、熊川宿にホタルを復活させようという取り組みが始まりました。熊川宿ほたるの会が、旧保育所敷地にビオトープをつくり、熊川小学校の児童と一緒にホタルの幼虫を育て、今年の夏には熊川宿にたくさんのホタルが舞うことになりました。



勢いよく流れる前川

8. 熊川宿のこれから

伝建選定から13年、ハード、ソフトの整備が進んできた中で、今後この町並みをどのように維持して、次世代に引き継いでいくか、さらに熊川宿の町や人の魅力が多くの人を惹き付け、いかに応援団から定住者へつなげていくかが大きな課題です。そのためには、まずここに暮らす住民自身が、町に誇りを持ち、交流の中でいきがいを見い出しながら、快適に暮らし続けるための取り組みを地道に進めていくことが大切であると思っています。



熊川いっづく時代村